

砂田明

現代夢幻能
仮面ペルソナのカタルシス

砂田 明 勸進公演

海よ母よ子どもらよ

1988年 12月 23日(金) 午後7時開演
シーガルホール(神戸文化小ホール)
主催 甲南大学 文学部 哲学教室
後援 (株)トリコ・インダストリーズ

ごあいさつ

今年も残り少なくなりました。

本日はお忙しい中、ようこそお越しくださいました。

さて、本日は、砂田 明氏によります「草の学校」、「天の魚(いを)」、「勸進帳」をご覧頂きます。

とりわけ「天の魚」は、《現代夢幻能》と銘打たれ、独特の仮面が、光と影の彩なす幻想的な世界へと私たちをいざないます。その舞台空間は、透明度が高いまま、深く重く水俣の世界を閉じ込めていると同時に、人間の心的世界へと開放されて、普遍的芸術にまで高められています。私たちは、そのような空間を共有することで、不思議な心のカタルシス(浄化作用)を経験することでしょう。

それでは、最後までごゆっくりご覧下さいますようお願い申し上げます。

本日はご来場下さいまして、誠にありがとうございました。

甲南大学 文学部 助教授 谷口文章

プログラム

ごあいさつ

甲南大学 谷口 文章

草の学校

原作・脚色 砂田 明

休憩

天の魚

原作 石車礼道子
脚色 砂田 明

勸進帳

作 砂田 明

私たち甲南大学文学部哲学教室では、講義以外に、春と夏の合宿、および公開講座を行ってきました。

春期合宿はセミナーハウスで研究発表や討論会を実施し、夏期合宿では環境汚染・破壊などの社会問題を追及するために、実際に現場でそれらの問題に取り組んでおられる人々を訪問したり、野外調査を実践してきました。また、公開講座では各回共通のテーマを決め、哲学だけでなく、心理学、文学などの専門の先生方をお招きして講演や討論会を開き、学際的な場を提供してまいりました。

そうした中で、今年度の夏期合宿では、四大公害病の一つである水俣病を取り上げることになりました。そこで、水俣問題をはじめ、さまざまな社会問題を一人芝居によって訴え続けておられる砂田 明氏を訪ねて、私たちは熊本県水俣市へと向かいました。

水俣は、有機水銀によって汚染破壊されながらも、牧歌的な静寂さで人々を抱擁する風土でした。この合宿で私たちは、すでに忘れ去られつつある水俣において、今日もなお、患者認定の裁判や海底の残留水銀などの問題が残されている現実を知りました。そしてまた、内に激しい正義感と怒りを秘めながら人をひきつけ圧倒する砂田氏のお人柄に触れ、私たちは多くの事を感じ、学ぶことができました。

その興奮は合宿を終えた後も醒めやらず、水俣で少ししか見る機会のなかった氏の一人芝居を、中でも現代夢幻能と呼ばれる「天の魚」を実際に目の前で見たいという思いはつのる一方でした。見る者を不安にする怨念に満ちた仮面が、真暗闇の舞台の上でどのような光景を展開するのか。相対の悲喜劇の世界に執着する私たちに、あの絶対の暗闇から何を突きつけてくるのか。そう考える内に、どうしても自分たちの手で神戸での公演を実現させたいと思いたちました。

公開講座と重ね合わせて、話が軌道に乗りだしたのは、氏に快く承諾して頂き、スポンサーにも恵まれたお陰でした。初めてのことで試行錯誤の繰り返しでしたが、会場の手配をはじめ、ポスター、チラシ、パンフレット、チケットの制作や配布、その他、一生懸命準備してきました。多くの方々の御支援を賜りまして、何とか今日の日を迎えられましたことを感謝いたします。

なお、本日の公演に続き、明日24日(土)甲南大学10号館にて、第5回公開講座・砂田 明講演会「私の演劇論」(午後1:30~3:30)を開催いたしますので、あわせてご参加頂ければ幸いです。



砂田 明氏紹介

1928年京都市生。高等商船神戸分校機関科在学中に終戦を迎える。軍国主義から一転して民主主義となり混乱している時代の中、1947年に同校を卒業し、甲種二等機関士の免状を手にするが、それをながめている内に突然役者になろうと決心し、半年後上京する。舞台芸術学院を経て、八田元夫演出研究所、新劇場、東西の商業劇場、劇団芸協、地球座などを遍歴し、舞台役者としての修業をつむ。東西の商劇場を遍歴してた時期には先代猿之助、先代幸四郎はじめ、勘三郎、長谷川一夫、渋谷天外、藤山寛美、森雅之、淡島千景、山田五十鈴、沢村貞子、ミヤコ蝶々、森繁久弥氏らと共演し、1960年代には俳優座養成所の講師となり市村正親（劇団四季）、小野寺昭や加藤健一（1982年度紀伊国屋演劇賞）を指導した。

1970年、地球座で新しい劇に取り組んでいる時、石牟礼道子著『苦海浄土』とめぐりあい、それをきっかけとして戦後生まれの若者たちと共に水俣巡礼行脚を行う。翌1971年には「天の魚」の章をのぞいて『苦海浄土』を劇化し、東京から水俣への上演行脚を行う。

1972年家族を伴い水俣漁村の袋・湯堂へ移住、農業見習いと個人紙「不知火の海から」の刊行開始。1975年個人紙を軸に『祖さまの郷土・水俣から』を上梓し（講談社刊）、運動誌「不知火——いま水俣は」創刊に当って責任編集者

となる。1979年、水俣病激症患者・田上義春氏とともに新しい自給農園を拓くため袋・神川へ移り、この地に水俣病の犠牲となった生類いっさいを祀る『乙女塚』を築くため演劇活動を再開し、一人芝居「海よ母よ子どもらよ」による全国勸進行脚を始めた。

現代夢幻能「天の魚」により、1981年1月第15回紀伊国屋演劇賞の『特別賞』を受賞し、同年4月には立教大学で上演400回を記録している。



作品解説

「草の学校」

原作・脚色 砂田 明

この作品は「《大道芸》海の胎（はら）」に収められているものである。

気取りのない関西弁の「草の精」が、人間も含めた自然界のすべてのものの「いのちのつらなり」の貴さを訴えかける。親近感のある「草の精」であるからこそ、彼の言葉、その訴えかけも、より身近なものとして観客に迫ってくる。

草の学校の授業が終わって、砂田氏夫婦そろってのムツゴロウおどりで楽しげな霧田気の中、幕が下りる。

「天の魚（いを）」

原作 石牟礼道子

脚色 砂田 明

夢幻能は、旅人や僧が、夢まぼろしのように故人の霊や神・鬼・物の精などの姿に接し、その物語を聞き、舞を見るといった筋立てになっている。このような形態をとる本日の上演作は、石牟礼道子著『苦海浄土』の中の「天の魚」という章を砂田明氏が脚色、1979年11月23日福岡市において初めて上演されたものである。

黒一色の舞台に、仮面をつけ、黒衣を身にまとった砂田氏——老漁夫、江津野家の爺さまの霊——があらわれ、彼の一家をある女性が訪ねるところから物語が始まる。

日本中が東京オリンピックにわき立っていた1964年の初秋、猿郷(さるご)の女が、百間港に近い水俣市江添の丘に住む江津野壺(もく)太郎少年とその一家を訪れた。江津野一家は一本釣りの専業漁家であるが、当主である清人をはじめ、当主の代わりに一家の舵とりをしている爺さま、主婦がわりの婆さまの上にも水俣病が色濃く影を落としている。

江津野老は「こるがあるために生きとる世の中でござす。」と言うほど好きな焼酎を飲みながら、訪れてきた女に天草なまりで語りかけるのだった。



「勸進帳」

熊本県水俣市袋——海山が迫り、燃えるような夕焼けが美しい浄土のようなその地に、水俣病の犠牲となった生類いっさいを祀る『乙女塚』を築くため、一人芝居「海よ母よ子どもらよ」による全国勸進行脚が始められました。これを出発点として、現在、砂田氏著書の印税や公演に際してよせられる寄付などにより運営されている“乙女塚基金”は、水俣病患者の方たちの援助の他に、海によって結ばれているアジアの人々とともに平和をめざす活動などを支援しています。

本日、公演会場（ロビー）に、砂田氏著書販売コーナー・募金箱を設けておりますので、皆様の御協力をお願い申し上げます。

最後に、この舞台をしめくくる、氏の切実な訴えかけの詩を紹介します。

「起るなはれ」

もし あんたが 人やーたら
起るなはれ 戦いなはれ
公定戦争や 水俣戦争やてえ
戦争のさらいなわし等のやる戦争や 人間最後の戦争や 正念場や
勝たな あかん 勝らぬかな
——子どものために 孫のために 親のために 先祖のために
そうしてこの自分自身のために 一度しかない人生のために

……負けたら？

負けたら一巻の巻りや ^{てまこ}生類の各地獄や
教も知れんほどぎょう山 お仲間が生類殺した室長はんなあ そのかわりに
ビニールやら ギッチャギッチャした油やら エントツやフルマやらテレビやら
教も知れんほどぎょう山のガラクク残して
この地球から 綺麗を青い星から
消えてしまっただけのバナシや

（抜粋）

髪のおしゃれはブラシから

シャンプーにこだわっているあなた、

ブラシは何でもいいと思っていないですか？



ヨーロッパの伝統と風土から生まれた世界の女性に愛され続けているデンマンブラシ。プロユースのために開発され、耐熱性、耐薬品性に優れています。構造上も数々の考え抜かれた特性をもっています。デンマンブラシはあらゆる髪質や長さに対して理想のヘアースタイルをクリエイトします。

デンマンブラシ総輸入元

(株)トリコ・インダストリーズ

〒556 大阪市浪速区塩草3丁目6-15

TEL 06-568-0731~2



BRITISH MADE
DENMAN[®]
Preferred by Professionals
World Wide